

枕と投席の間は、四季をかたどりて四扇を隔べし、投壺のごとく向ひ合て著座し扇をかまへ、互に先投の辭義ありて投はじむる也、投る事都て十二遍にして滿投す、只かり染の翫といへども、三十一文字になぞらへ、勝負によりて褒美さまざま、有香のごとく記録にのせ、百人一首の歌を書く業なれば、禮法をみだるべからず、

投席之圖 ○圖 略

左右扇四たけづ、下りてならぶ、投席のまん中に、的臺をなすべし、的臺の左右に執筆一人と、的玉をなす人さし向ひて座すべし、

相撲にして催^ス時は四本柱を用^ユ、圖のごとし、○圖 略

四本柱太^サ三寸、廻り長^サ疊ぎわより屋根のきわ迄、扇二^タたけづ、

屋根青土佐紙のるいにて張^ルべし、尤屋根障子は格好見合、

幕は紅白ちりめん布交也、は^ゞ三布にて四寸、丈^ケは四本柱の四方一^ツはい、四本柱紅白ちりめんにてまくべし、

投席は前に有圖のごとし

東西をわかち、關關脇小結前頭段々ニ定メ組合事也、執筆の向に座し、的玉ヲ直ス人、軍配ヲ上ケて勝負ヲわかづ、則行司也、

〔投扇新興〕表十組の圖 ○圖 略

瀧川 瀬をはやみ岩にせかる、たき川の

散花 久かたのひかりのどけき春の日に

龍田川 ちはやぶる神代もきかずたつた川

秋風 あき風にたなびく雲のたへまより

過料

二點引

三點

七點

八點